
なにかが違うげんそうきょう

Rizly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なにかが違っげんそうきょう

【Nコード】

N2593Y

【作者名】

Rizly

【あらすじ】

世界と言う単位は無数にあるが、それを見る人からは一つの世界しか見ることができない。

たとえば、ある人がある世界では生真面目だったのが、別の世界では墮落した人格だったりする。

当然、その時あった時節柄のイベントの中身も変わったりするわけ。

そんな無数の世界のうちの一つの世界、そしてその世界の中の幻想郷のおはなし。

この作品は上海アリス幻楽団 東方Projectを題材とした
二次創作です。

余裕でキャラ崩壊やありえないことになっていたりしますので、そ
う言ったものが嫌いな人は見ないようお願いします。

博麗の巫女の役目は異変の解決である。ただ、場合によっては妖怪退治などを行ったりすることもあるが、基本は前に述べたように異変の解決というのが幻想郷の認識である。

彼女は中立であり、何事にも公平に見る。言い方を変えてしまえば興味がないから中立的な立場になっているとも言えるが。

そんな彼女が境内の掃除をしていたときに、彼女の勘が何かを告げた。「何か起きた」と。

そういえば少し寒い感じもする。彼女はそう思った。

自分が少し露出（と言っても肩から二の腕までにかけてだが）があるとはいえ、夏真つ盛りの今ここまで冷えるというのはおかしい。

最初は勘だったが、ここまで来ると勘ではなくてもはや確信する。

はあ、と巫女はため息をつくと、手に持っていた箒を片付けに戻る。そのついでにお祓い棒を持ってきて、改めてため息を吐く。

正直、面倒だった。

面倒なのが異変解決ではなく、今回の異変からスペルカードルールというものが適用されたのが巫女にとっては面倒事だった。

妖怪側から提案があつたスペルカードルール。人間であり、巫女である彼女が考案したのではない。

もう一度言おう。妖怪が考案した。その発端が今回の巫女の異常性を認識せざるを得なかつたことから始まる。

その前までの巫女はそれほど強敵でもなかつたのだが、今回の巫女は歴代の博麗を名乗る巫女と比べてもぶっちぎりで異常だった。

霊力も使える割には、素手で殴って解決するような巫女。大妖怪ですらボロボロのギタギタになるまで殴られ蹴られ、何十何百いようと的確に全て殴り飛ばし、返り血を浴び様が関係ないとも言いたげな異常な巫女。

それに恐怖した妖怪たちが結託し、命をかけて考案したのがスペル

カードだった。

妖怪たちももう死に物狂いでアピールをし、幻想郷にこう役に立って、争いごとがどれだけ平和的に解決される。大妖怪同士の衝突の時に影響がなくなるとか。

思いつく限り必死にアピールをし、しぶしぶ巫女に受け入れられたという歴史を持つ。

それはさておき。

スペルカードルールが適用された初めての異変になるというわけだが、無視しようかなとひそかに思う巫女だった。

本日三度目のため息を吐いてから出かけようとしたが、誰かが自分の名前を大声で呼んでいる。その誰かは解ったので巫女は少し待つことにする。

結構な速度で飛んできたその人物は巫女の目の前に着地する。くせの長い金髪に黒い三角帽を被り、黒いエプロンドレスのような服を着ている。

「魔理沙。何の用？私急いでるんだけど？」

「つれないぜ霊夢。急いでるって言うのは、あっちから出てる真っ赤な霧のことか？」

「そうね。面倒なことこの上ないけど……でも、あんたは嬉しそうね」

「そうだな。オレはこのスペルカードルールは気に入ってるけどな」

「直接ぶん殴ったほうが楽よ」

「おお怖い。で、もう行くんだろ？」

「ええ」

「じゃあ、オレもついていっていけ」

どうせ断っても付いてくるんでしょう。と霊夢は思ったので、何も言わず飛び立った。

ちょっと違うところまきよう 2

肉食の妖怪と思ひ浮かべるならどのような存在を思ひ浮かべるだろうか？姿がごつい大型の妖怪だろうか？

少なくとも、自分より小さい身体つきの少女が丸のみするなんてことは想像できないだろう。

普通、魔法の森にはたくさん妖精がいる。妖精は異変の時なんかは気が荒くなり、普通なら誰彼構わず襲いかかってくる。はずだった。

はずだったというのは、妖精が霊夢の姿を見るとささっと逃げている。

「霊夢の姿を見た妖精が逃げて行くぜ」

今代の博麗の巫女には絶対にかかわってはいけないという決まりでもあるのだろうか。霊夢にとっては面倒事が減って助かる話だが、魔理沙は面白くなさそうだ。

「あー。スペカぶっ放したいぜ」

「スペカ？」

「スペルカードのことだぜ。略してスペカ。オレのはこう、ぶあーって行くんだ」

聞いておきながら「あっそ」と素っ気ない返事を魔理沙にすると、さっさと進んでいく。「つれないぜ」と魔理沙がつぶやくが、霊夢は無視する。

誰もいない空を飛び続けていると向こうから誰かが飛んできた。妖気が感じられることから、大方妖怪だと思われる。

金髪のショートヘアで黒い服を着ている。

「巫女なのかー」

「そうよ。で、あんたは？」

「ルーミア。それで、巫女は食べていい人間？」

無邪気な笑顔でルーミアは霊夢にそう言うと、霊夢は「じゃあ」と続けた。

食べていいか聞いてきた人食い妖怪にゆっくり近付いて、その妖怪のあごに霊夢は自分の右手を添えて、自分の目を強制的に見つめるようにくつと上げた。

「貴方は、食べていい妖怪かしら？」

後ろで魔理沙が「ああああおおお」と言いながら悶えているのを霊夢は気にしない。

霊夢の目をじつと見たルーミアは、次第に頬を赤く染めていった。目をそらそうと顔を横にしようとルーミアは試みたが、何故か身体が言う事を聞かなかった。術をかけられたりしているわけではないと解っているルーミアは自分が巫女に見とれているということが解ったので、抵抗せず、だが小さな声で巫女に「食べる……どういう意味？」とかるうじてだったがルーミアは言った。

霊夢は首をひねり、「どういう意味かしら？」と霊夢はルーミアに尋ねた。

気がつく人は気がつくが、ルーミアと霊夢の見解は違っている。

ルーミアは『自分の口から恥ずかしいことをわざと言わせようとしている』という意味だと思っていたが、実際に霊夢は『食べるってどういう意味か』と意味で尋ねていた。

その齟齬に気づかず、ルーミアはさらに顔を真っ赤に染め上げた。

「い……」

「い？」

「言えるわけないよー……」

そう言っ、ようやく身体が言う事が聞くようになったらしいルーミアは凄いスピードで飛び去って行ってしまった。

何がどうなっているのか解らない霊夢は首をひねったが、まあ面倒事が減ったからいいかとのんきに考え、とりあえず先に進むことにした。

「な、なあ、霊夢」

「何？」

「その、さっきの妖怪のことをどう思ってるんだ？」

「どういうこと？」

意味かわからずに霊夢は聞き返したが、魔理沙は「その、あの、なあ」「と言っただけで要領を得ない返答だったためにさらに首をひねる結果となった。

ちょっと違う「じつまきょう」 3

妖精とは、場所場所によって意味合いが違う。フェアリーとしての意味である妖精、妖怪や魔物としての妖精。また、場所場所によって姿が違う事もある。

小さくかわいらしい時もあるれば、ごつい何かであったり、はたまた荘厳な存在である場合もある。

霧の湖は妖精の遊び場であるがゆえに、多くの妖精たちが自然と集まることが多い。

その上空で対峙している現状を魔理沙は後にこう語る「ヤンデレパネエ」と。

それはそれとしてだ。上空で対峙しているの霊夢でも魔理沙でもなく、水色の服を着た氷精と呼ばれる妖精と、緑色の髪の妖精が対峙している。力がそのあたりに飛んでいる妖精とは違うので、恐らくは大妖精と呼ばれる妖精だろうと霊夢は推測した。

どうしてこんな現状になっているのかというと、霊夢と魔理沙は普通に進んでいたただけなのだが、前から氷精が必死の形相で飛んできたのが発端だった。氷精は霊夢と魔理沙の姿を見た瞬間、「まずい」という顔をした。

悪戯がばれたという様子ではなく、「何故このタイミングでいるのか」という感じだ。

そんな表情を浮かべながらも氷精は一気に霊夢と魔理沙の横を通り過ぎた。が、再び戻ってきた。

「ん？何で戻ってきたんだ？」

「誰かに追われてるみたいね。それも瞬間移動できるような誰かが」「何で解るんだ？」

「気配がしたから。そして今そいつはあの氷精の前に出てくるわ」「霊夢が言った通り氷精の前にすつと緑色の髪をした妖精が突然現れ、

最初の状態に至る。

「それで霊夢。どうするんだ？先を急ぐかこれを見るか」

「……あの妖精に不意打ちを食らいたくなければ残るべきね」

「どういうことだ？と魔理沙は大妖精を見ると、目からハイライトが無くなっており、『私、ちよつと病んでます』という目でこつちをロツクオンしている。

ああ、なるほどと納得する。霊夢だったら楽に避けられるだろうけど、自分はそうではないだろう。そのせいで霊夢に迷惑をかけるつもりはないので、魔理沙も霊夢と同じように残ることにした。

しばらくこちらをロツクオンしていたが、氷精の方を見た。

「ねえ、チルノちゃんは……どうして、私以外の女がいるのかな？」

「落ちていて大ちゃん。この二人は恐らくこの先に用があるんだ。だから、通してやらないと」

「落ち着けて。ムリだよ。だって、汚い泥棒猫が私の大事な大事なああいじなチルノちゃんを奪おうとしているんだもの」

くるくる、くるくる。とその場で回りながら大妖精は言った。

「大ちゃんが何を言っているのか解らないよ」

「……チルノちゃんは、私のことが嫌いなのか？」

「友達としては好きだよ」

くるくると回っていた大妖精がぴたりと止まった。顔に不気味な笑顔を張り付けたままチルノを見て言い放つ。

「私はねえ。それ以上の存在になりたいの」

「それ以上？どういうこと？」

「チルノちゃんのそばにいたい。チルノちゃんと一緒に暮らしたい。チルノちゃんと一緒に寝たい。チルノちゃんと一つになりたい……」

…ふふ。言えばキリがないなあ」

自分の体を抱きしめながらくねくねし、ふふふと笑いながら言う大妖精にチルノはぞつとした。

「ねえ。氷精」

この一連のやりとりに口を出していなかった霊夢はチルノに声をか

けた。チルノは内心『何でこんなときに』と思いながらも大妖精を警戒しながら霊夢の方を見て、大妖精はびたりと止まり、目からハイライトが消えた無表情で霊夢を見る。

「私は面倒事が嫌いなもの。異変の解決に影響が出そうだから大妖精を私がぶっ飛ばすわ」

チルノは考える。

湖の真ん中から紅い霧がでており、今この大妖精の行動はその影響を受けている。恐らく、自分では友達である大妖精を倒すことは難しい。

だとすれば、荒っぽくなるが巫女に任せた方が手っ取り早い。

その結論に至ったチルノは答えた。

「お願い。妖精は死んでも復活するからどんつとやっちゃっていい。あたいでは手加減をしてしまうだろうから」

「解ったわ。じゃあ、貴方は下がってて」

「ごめん」

チルノは霊夢に礼を言う。霊夢は手をひらひらと振った。

「さて、選手交代よ妖精。あんたをさっさと沈めるわ」

「人間が、何を言うのかなあ」

いつの間にか大妖精は手にクナイのようなものを持っていた。霊夢はそれに気が付いていたが動じていない。

「死んじゃえ」

大妖精の姿がふっと消える。それでも霊夢は動じることなく、冷静に身体を右に移動させた。その直後、霊夢がいたところには大妖精の手とクナイのようなものがある。さらにその後ろに大妖精の姿がある。

霊夢からは見えないが、大妖精は必殺の一撃を外したことに驚き、その驚きが顔に出ていた。

「解りやすい一撃だったわ」

「くっ！」

大妖精が再び姿を消した。霊夢はまた動じることなく、距離を取る

ように後ろに下がった。

やはり霊夢がいた位置に大妖精とクナイを突き立てている姿。後ろで不覚を取ったから今度は前から攻撃をしたかったのだろう。

「ぬるいわね」

霊夢にそう言われながら、表情には出さなかったが非常に焦っていた。何しろ、自分の得意な瞬間移動からの一撃必殺を2度も外したのだから。

だから、今度はブランクがないように直接決めようと思い、一直線に霊夢に向かって言った。霊夢はやはり動じることなく、じっと大妖精を見て言った。

「仏の顔も三度。この言葉を覚えておくといいわ」

霊夢は懐からスペルカードを取り出した。そして、ルールにのっとって宣言する。「夢想封印」と。

ここまでだったら普通のスペルカードだったが、宣言は続いた。「殴打」と。

宣言完了後、大妖精の顔に霊夢のストレートパンチが決まり、ズドン、と物騒な音が響いた。

それにあわせて大妖精が吹き飛び、大妖精が気配が無くなった。

チルノが言う一回休みの状態になったのだろう。霊夢はそれを確認すると、ふう、と一息ついた。

「本当に助かったよ。あそこまでひどくはならないんだけど」

「別にいいわよ。それより、あの紅い霧ってこの湖から来てるんだけど」

「そうだよ。中央にある館……名前は忘れたけど、そこから出てるよ」

「ありがとう。悪いけど、私たちは先を急ぐから」

「ああ。異変解決、がんばって」

チルノの見送りを受け、霊夢たちは先に進んだ。

ちょっと違うじつまきょう 4

門番。文字どおりの意味であるが、門をする者のことを指す言葉である。その者が機能していないと、不審者を中に通したりして大変なことになる。

湖を超え、紅い色をした館の前に到着した。門のところに誰か立っている。恐らくはこの館の門番だろう。

霊夢はめんどくさそうに門番をどうしようか考え、魔理沙は門番をどう吹っ飛ばそうかを考えながら進んでいた。のだが。

門番をしているチャイナ服のような服を着ている女性が、霊夢と魔理沙の姿を見ても反応しなかった。霊夢と魔理沙は警戒しながら進むが、霊夢をみた門番は、顎で霊夢に『通れ』というような合図すら出してきた。

さらに霊夢と魔理沙は警戒し、わざわざ門の前で立ち止まった。

「通らないのか？」

表情を無表情のまま変えることなく門番は言った。

「怪しすぎるのよ。何でこの霧の発生元である門番が私たちを通そうとするのよ？」

霊夢の言う事は最もだろう。門番は「ああ」と納得した。

「この霧を出されたのは反対だからだが。通すのはそうだな。お前が博麗の巫女であるという事と、今日でこの門番はクビになったんでな。割と好きにやらせてもらおうと思ったんだ。人里に迷惑をかけて、作物に影響が出るようなことをするような奴と共に仕事をしたいと思うか？」

この妖怪は紅い霧が出ていることが相当不愉快らしい、無表情だった表情が怒りの表情が見え隠れしながらも淡々と言った。

「その妖怪その妖怪次第でしょう。あとは働く理由かしらね」

霊夢がそう言うと、門番をしている妖怪はぼかんとしたが、いきな

り可笑しそうに笑いだした。

「確かにそうだよ博麗の巫女。久々に笑わせてもらったよ。まあ、こっちの事情はそんな感じだ。私を信じるならここを通ればいい」
「……あんたがそれでいいならね」

先程までいぶかしげに門番を見ていた霊夢だったが、表情を変えることなく門を抜けて言った。魔理沙は霊夢に『おい』と声をかけたが、ひらひらと手を振っているということから問題ないのだろうということなのだろう。

ずんずんと進んでいた霊夢だったが、急に立ち止まった。門番の方を向きなおすことなく「そうだ。この館にだれがいるか教えてくれない？」と言った。

「普通だったら教えないが、紅い霧をどうにかするっていう条件なら教えてもいい」

「どうにかするために私はいるのよ。面倒だけど」

霊夢は門番の問いに対してそう答えると、門番は笑っていた。ある程度笑い終わった後に門番はこう答えた。

「微妙な性能の妖精メイド。引きこもっている実力派の魔女。時間を止める人間の微妙なメイド。吸血鬼の当主。その妹。最後に私」
「十分よ。感謝するわ」

霊夢はそう言つて先に進もうとするが、今度は門番が「いいか？」と言つた。

「次の就職先を探しているのだが、どこか心当たりがないか？」

「門番業だったら知らないわ。そうね。うちの食事作りだったらお給金はでないけど、食と住だけは保障するわ」

「解つた。だが、それでもいいかもしれないな」

門番は楽しそうにくくつと笑い、それ以上話をすることはなかった。恐らくは門番が仕事をしているのだろう。

霊夢は特に気にした様子もなく、館の中へ進んで行く。魔理沙も後を追おうとしたが、門番に声をかけた。

「そつえば名前はなんて言うんだ。オレはしがない魔法使いの霧

「雨魔理沙だ」

「そういえば名乗ってなかったな。私は紅美鈴。しがない門番だよ」
美鈴には見えないが、魔理沙は満足そうに屈託のない笑顔で笑った。
そして、魔理沙からは見えなかったが美鈴もどこか楽しそうに笑っていた。

ちょっと違うところまきよう 5く分岐点

館というのは広い。広いからこそ迷いそうになったりするものだが、この館はそんなものじゃなかった。

やけに長い、やけに部屋が多い、やけに入り組んでいる。それもいやらしく複雑に道が分岐していたりする。

霊夢の勘である程度まで進んだ葉いいが、上の階と下の階に分岐しているところの前でピタリと止まった。自分の勘はどちらも行かなくて必要があると言っている故、どうしたものかと霊夢は考えた。

10秒くらい霊夢が悩んだところで、魔理沙が声をかけた。

「霊夢。オレから提案何だがいいか？」

「ちようどいいわ。私からも提案があるわ」

「……オレたち気が合うな。もう結婚するか」

「……確かに気が合うわね。でも結婚はしないわ」
「チツ、と本気で悔しそうに舌打ちを魔理沙を霊夢は無視して、「魔理沙、どっちに行く？」と言った。

「霊夢はどっちにいきたい？」

「そうね。解決により近い思われるのは上。下は間接的に解決が必要というところかしら」

そう言われて魔理沙は瞬時に答えを出した。

「じゃあ、オレは下に行くぜ」

「私は上ね。あんたといると話が早くて助かるわ」

そして互いに決めた道を進んで言った。

ちょっと違うごつまきょう 6 魔理沙ルート

魔女という言葉は、女の魔法使いや性悪な女性を指すものである。魔理沙はもっぱら前者であり、普通の魔法使いと自称している。何故魔理沙はそうなったのか。それは頭の固い父親への反感からである。

詳しいことはここではふれないが、父親と大喧嘩し勘当された後に普通の魔法使いへとなった。

ちなみにこの父親。魔理沙を勘当して家を追い出したと知った魔理沙を溺愛していた母親が父親をボッコボコにしたのは魔理沙も知っていたりする。母親とは良好な関係を気付いている魔理沙であった。それはさておき、そんな普通の魔法使いの霧雨魔理沙はため息をつけていた。

「ちつ。霊夢と一緒に異変を解決したかったんだがなあ」とはいえ、自分が上に行くと言ったところで霊夢は下に行くと言ったのは間違いない。

「あー。ちくしょう！オレがカツコいいスペルカードを披露して霊夢をメロメロにする作戦がああ！」

箒で本棚をバシバシ叩く。要するにやつあたりである。

さて、ここには誰かがいる。そんな中大きな声と大きな音を立てて「私はここにいます」とアピールしたらどうなるか。

「ただただだだだだれれれれでですすすすかかか。おおおおおおばばばばけけけけけけなんてててて怖くなななのでででででないでええ」

答え。誰か来る。

「おばけではないけどな」

なんか良く解らない声が聞こえた魔理沙は八つ当たりをやめ、持ってた箒を肩に担ぎ、やってきた誰かに視線を送る。

赤い短い髪の毛をしており、びしっとした服装をしているが悪魔み

たいなアクセサリーをつけた女性が涙目になりながらこっちに走って向かってきていた。

走るたびに胸がゆさりゆさりと揺れて女性をしっかりアピールしている。

そのアピール具合を見て、魔理沙は自分の胸を見てポンポンと叩いてみる。あることにはあるが、ないとも見える。数秒ほど考えてから「オレはこれからだぜ」と自己完結する。

「で、それはいいとしてだ。お前は誰だ？」

前からやってきた自分に持っていない女性の部位を持っている（胸的な意味で）悪魔に声をかけてみると、「……………人間、ですか？」と小さな声で返答が返ってきた。

「人間以外ならなんだ？」

魔理沙がそう言うと、（胸的な意味で）悪魔は自らの服をただして、涙目を吹いてこほんと咳払いをした。

「よく来た人間。ここは我が主である「あ、お化け」ひいひいひいひい×嫌だ嫌だ嫌だお化け怖いお化け怖い……………」

途中で魔理沙がお化けと言っただけで、絶叫して走り去って行ってしまった。

「まさかアレが今回の異変に関わっているわけないよなあ。間接的に関わっているのがアレだったら泣くぞ、オレ」

主がいるっていうことはそっちだろうしな。と自己完結した後、その主がどこにいるのかを探すことにした。

筈にまたがり、空を飛ぶ。自分の数十倍くらいある本棚が収まっているのだから、こうでもしないと探しようがない。

飛んでみると、さっきの（胸的な意味で）悪魔は隅の方でしゃがんでいて、頭を抱えて震えていた。

……………見なかったことにしよう。

とりあえず異変解決を優先するために主を探すことにした。

……………それらしいのはすぐに見つかった。

（胸的な意味で）悪魔がガクガク震えている反対側に大きな机があ

り、そこで読書しているのがいる。

魔理沙はやったと思い、読書をしている誰かの方に飛んで行った。こっちの問題が解決すれば霊夢と一緒にいる時間が増える。そう思うと魔理沙の顔に笑みが浮かんだ。

大きい机で読書している少女の反対側に折り、肩に箒をかついでから「邪魔をするぜ」と声をかけた。

魔理沙が声をかけると、鬱陶しそうに読書をしている少女は顔を上げた。そして、魔理沙の顔をしばらくじっと見ると、急に読書をしている少女の頬が真っ赤になった。

「はじめましてだな。オレは霧雨魔理沙。お前は？」

「ぱ。パチュリー、ノーレッジ」

頬を真っ赤に染め、下をうつむきながらも魔理沙をちらちら見るパチュリーは恋する乙女のようなようだった。だが、魔理沙はパチュリーの異変には気付いていなかった。

それが悲劇の始まりだった。悲劇の引き金を引いたことにすら気付かない魔理沙は、パチュリーの名前を「そうか。いい名前だな」と言って屈託のない笑顔で褒めた。

「どどん乙女化しているパチュリーはさらに真っ赤になりながら」「あ、ありがとう」とたどたどしく答えた。

それでも鈍感な魔理沙はパチュリーの様子に気づかず言葉を進めた。

「ところでパチュリー。外では今真っ赤な霧が出てるんだが、心当たりがないか？」

「……あるわ」

「そうか。それを止めることは」

「できるわ」

「だったら、止めてくれないか？」

「かまわないわ。……でも、三つ、お願いを聞いてほしいの」

「お願い次第だな。三つ言ってみる」

「まず、私のことをパチュリーって呼んで」

「いいぜパチュリー」

「……そして貴女のこと、魔理沙って呼んでいい？」

「どんとこいだぜ」

「……ありがとう、魔理沙」

「それで、最後の頼みって何だ？」

「私の頬でいいから、キス、してくれる？」

「妙なお願いだと思ったが、魔理沙はまあいいかと思い「ああ。いいぜ」と安請け合いしてしまった。

「目を瞑っているから、その間お願い」

パチュリーはぐっと強く目をつぶった。魔理沙はなんか変だとは思いつつも、パチュリーの頬にチュツとキスをした。魔理沙にしては大したことなかったが、パチュリーからしてみれば大したことがあるものだった。その結果、

「むきゅー」

ボタンとそのまま後ろに倒れてしまったパチュリー。突然のことだったので魔理沙もかなり驚いたが、倒れたパチュリーの様子を確認すると、幸せそうな顔をして気絶していた。

放っておいてもよかったが、魔理沙にはそれができなかった。そして同時に悟る。霊夢と合流できないことを。

「オレ、泣いていいだろうか」

仕方がないのでパチュリーを床に寝かせ、魔理沙は膝枕をした。

ちょっと違うところまきよう 7 霊夢ルート

瀟洒とは、『すつきりとあかぬけしているさま。俗っぽくなく洒落ているさま』という意味である。

カリスマとは、『人々をひきつけて信服させるある種の人格上の特質、魅力』という意味である。

魔理沙と別れてから霊夢はまっすぐに異変の解決をするため、恐らくこの主である吸血鬼がいる部屋まで向かうが、自分の勘が告げている。『首謀者は、吸血鬼ではない』と。

とはいえ、真相はその部屋に着けば解るだろう。そう思いながらほとんど前に霊夢は進む。

しばらく進むと、怪しい扉がある。ここに吸血鬼がいるのだろう。が、その手前にメイド服を着た人がいる。

正しくは倒れているという方が正しい。おまけに殺人現場真っ青な血だまりができており、床を血で汚していた。さらにおまけに言うのと、出血部位が鼻である。

「誰かの攻撃を受けたわけではなさそうね。とりあえず邪魔だからメイドの足を引っ張り、廊下の横に乱暴に投げておく。ごつんという言葉が聞こえたが霊夢は無視することにした。

メイドの存在をきれいさっぱり頭から除外した後、怪しい扉をぎぎいと開ける。部屋の中は広さの割に若干薄暗く、今自分がいる位置からでは視線の向こうに誰かが座っている程度しか解らない。

霊夢が用心しながら近付いて行くと、徐々に姿が明らかとなった。

「うー？おねえちゃんだれー？」

見た目と同じ年齢ではないだろうが、精神が幼い少女……というよりも幼女がそこに座っていた。右手にはスプーンを持ち、左手にはプリンが入っているガラス容器。口はカラメルソースでベタベタの幼女が座っていた。

霊夢はすごい頭痛に襲われた。これが主だとしたらどうしようかと。

とはいえ、明確にしなければいけないことがある。

「ねえ。紅い霧を出しているのはあんた？」

「あかいきりー？わたし知らないよー？」

「そう。なら、あんたは誰？」

「れみりあだよー。このやかたのあるじー」

恐ろしいほどの頭痛と倦怠感が霊夢を襲う。無論、外部からの干渉や自身の体調不良ではなく、この目の前にいる幼女がこの主とのたまったことが原因である。

本当にこれからどうしようかと思ったとき後ろに気配を感じた。霊夢は後ろを見ると、誰かがこちらに向かって歩いてきており、徐々に姿が明らかになる。

正体は、赤い服を着た金髪の主とのたまったレミリアと同じくらいの身長少女がいた。

「あー。博麗の巫女が来たのかあ」

だが、そんな少女の出現にも霊夢は動じることもなく、「あんた誰？」と尋ねた。

「はじめまして。私はフランドール・スカーレット。そこにいるレミリア……いえ、姉の妹よ」

特に何をする様子もなく、にっこりと笑ってフランドールは言った。フランドールの姿を見つけたレミリアは無邪気な笑顔を浮かべ、たまったとフランドールに向かって走り、思いつきり抱きついた。

「あー。お姉様ったら口の周りをこんなにベタベタにして」

フランドールはポケットからハンカチを取り出して、レミリアの口を拭いた。

「巫女が来たってことは、ここを起因とした異変でも起きてる？」

「そうね」

「あー。犯人の目星はついてるから犯人をしばいておくよ。異変が起きた理由とかもだいたい解ってるから説明いる？」

「そうね。お願い」

「解ったわ。とりあえず犯人をしばきに行くからちよっとお姉様離

れて」

フランドールがそう言ってレミリアを避けると、新たな殺人現場を作りだしていたメイドに目を向けた。そしておもむるに「このド変態墮メイド！」と言って蹴っ飛ばした。

普通、吸血鬼の力で蹴っ飛ばされたらどうなるか。というより、普通の妖怪でもかなりのダメージを受けるはずだが。

「あああ、幼女に蹴られるって、す、て、き」
無傷でそうのたまった。

霊夢はその声を聞いた瞬間ぞつとし、無意識に身体を抱きしめ、気が付いたら全力でメイドを蹴っ飛ばしていた。蹴っ飛ばしたメイドをフランドールがコンボをつなげ、空中コンボが決まっていた。最後たたき落とし、メイドの意識をしっかりと刈り取った。

「変態って厄介よね」

顔面と手に血がついたままそう言うフランドール。自分の手に着いた血と顔に着いた血を自分のハンカチでぬぐってから、フランドールはハンカチをその場に捨てた。

「それで、異変の真相よね。その前に、前提になる話として私と姉の話をしていい？」

霊夢はこくりと頷いた。

「そうね……今から100年だったかな？ちよつとその辺は怪しいけど」

と言って、フランドールは語り出した。

「今は違うんだけど、私は昔気が触れていて、さらに情緒不安定な状態だったの。いつも何かを壊すこととか考えてたり、なんかもう考えていることがグチャグチャ。そんなある日、どうしてそうなったのかは覚えてないけど、姉のレミリアと殺しあいに発展したの。私としては遊んでいるつもりだったけど、姉はそうではない。必死に私を外に出さないように、他人に迷惑をかけないようにって。私を止めようとしていたの」

「今だから解るけど確かに危ないよね。気が狂っていて、能力があ

りとあらゆるものを破壊するものだからそんなのを出したら一晩で街が血の海になるよね。でも当時の私はそんなことが解るはずもないから、何で外に出してくれないかってことになった」

「で、説教する姉が煩くなつた私は、姉のあるものを壊したの。何を壊したか解る？」

フランドールは霊夢に尋ねた。霊夢も考えてみるが、何かは解らなかつた。だから、「何を、壊したの？」と尋ねた。

「姉の友人であるパチュリー……この館にいる魔女なんだけど、彼女の分析結果をそのまま言うけど、私が壊したのはカリスマ……あと、それに引つ張られる形で姉の形成されていた人格の一部」

「口うるさい鬱陶しいと思つた姉を黙らせる方法を取つた結果が今の姉。『フラン、お前は地下で暮らせ』って命令口調が一転して、『フランはわたしといっしょにねるのー』なんて言われて抱きついてきて、その時の私でも『あれ？』って思つたよ」

フランドールは苦笑気味に言つた。だけど、霊夢は一つ疑問があつた。

「どうやってあなたの狂気……それを治したの？」

「パチュリーに『自分の狂気を壊せるんじゃない？』って言われてやったら今の私」

「なるほど。それで、異変は何で起こつたの？」

「……言わないとだめ？身内の恥だから言いたくないんだけどなあ……紅い霧止めてOKじゃだめ？」

「私が知つておいた方がいいと思つたよ」

フランドールは若干嫌そうな顔をして、「うー。解つたよ」と言つて、異変の真相を語り始めた。

ちょっと違うじつまきょう ぐいへんのしんそう

「じゃくやー」

皆が食堂に集まっている横でデザートを食べていたレミリアは、下つ足らずな声でプリンのカaramelソースを口の周りにべたべたとついている状態のまま、自分に仕えているメイドを呼んだ。

レミリアはメイド（咲夜）が自分に仕えていると思っっているが、正確には違う。

レミリアを暗殺しようとしたのが発端だが、レミリアの今の現状を見て、鼻血を吹き出して気絶するという失態を見せ、回復した後には『私はおぜうさまの犬になります』と言いだし、その後いろいろあったがなんとか住人になれた。

そのメイド（咲夜）がどうも好みの所以からかレミリア至上主義（次にフランドール）であるがため、レミリアが望むことは命を張つてでもと思うところがある。

故に、そのメイドにとってご主人様^{レミリア}に犬（咲夜）の名を呼ばれることは最高の誉れであり、最優先にすべきことであった。

「お呼びでしょうか。レミリアお嬢様」

鼻血をだくだと流しながらレミリアの元に能力を使って現れる咲夜。レミリア以外は咲夜の性格を知っているため無視しているが、レミリアだけは心配している。

「じゃくやー？またけがしたの？おはなからちがでてるよー」

レミリアはポケットから純白のハンカチを取り出し、咲夜の鼻と鼻血をぬぐった。

そのメイド、鼻血が再び吹き出しそうになったがなんとか耐える。

「お嬢様。私めごときにそのようなことをなされるなんて……」

「でも、いたいたいなんでしょう？」

首をひねりながら言うレミリアを直視した墮メイドは愛が鼻から拭き出そうになるのを本当に耐え、なんとか答える。

「だ、大丈夫でございます。そ、それはそれとしてどのような御用でございますでしょうか？」

言葉も怪しくなりながらもこれ以上鼻血を出すわけにはいかなかったので（レミリアが怖がりかねないから）無理矢理に話の内容を変えた。

「そうだー。あのね、わたし、かりすまがほしいの」

「カリスマ？」

「そー。しゃくやならどうすればかりすまがてにはいるかわかるとおもったの」

そして、メイドは瞬時に思考を働かせる。どうすれば自分の主の願いをかなえられるかと。そして、思いついた。

「異変を起こすというのはいかがでしょうか？」

「いへん？でも、わるいことでしょうか？」

「ですが、それ以外にカリスマを手に入れる方法は考えられません」
咲夜に断言されたレミリアは困ったような表情をし、「むー。わかった。ほかのほうほうもかんがえるー」と言っつて、咲夜の元から走り去っていった。

そしてそれを見届けたメイドは、思いつきり鼻から愛情と忠誠心があふれ出た。

「で、姉のことだからこの時点でカリスマ云々を忘れたけど、墮メイドは覚えていた。だから墮メイドが異変を起こした」

「人間のメイドよね？」

「まあ、妖怪つて言ってくれた方がよかったって思うよ。下手をすれば私たち吸血鬼より丈夫なド変態墮落メイドだから」

「それで、フランドールがOKを出したから異変になったってこと？」

「違うわ。私は寝てたし、パチエはメリットもデメリットも特にないから中立だし、美鈴さんは絶対に反対する。となると残りはこの

墮メイドの独断しかないのよ」

「……なんとというか、災難ね」

「そう言ってくれるだけありがたいよ」

と、2人は墮メイドに視線を送ると、意識をすでに取り戻しており、悦に浸りながらくねくねと身体をよじっていた。

それを見た2人は、墮メイドの意識が飛ぶまで殴りつけた。

ちょっと違うじつまきょう　ぐいへんのあと

「っていうわけよ」

霊夢が遊びに来ていた魔理沙とともに、神社の縁側で今回の異変について話（というか愚痴）を話していた。

「うわぁ。それは頭痛いなぁ」

魔理沙は頭を押さえてオーバーリアクションをする。霊夢はそれを見ていつものことかと内心思った。

「魔理沙も相変わらず女の子にもてるわね」

「嫉妬か？でも安心しろ。オレは霊夢一筋だぜ」

魔理沙が言う事をいちいち気にしたらやっつけられないので無視しておく。無視されたことを気にすることもなく、魔理沙は普通にふるまう。

それがいつもの日常……だった。

「ま、魔理沙……今日、今日こそ」

「んげつ。パチュリーだ。また変な小説に影響されたか……悪い。

オレは逃げる。茶美味かつたぜ」

そう言っただけ湯のみを乱暴に置いてから箒に乗って飛び去って行った。それを追うように紫色の髪の毛でパジャマのような服を着た……あれがパチュリーか。と霊夢はそう認識した。

しばらくぼおっとながら茶をすすっていると、また空から誰かやっってきた。

「門番？」

「巫女には名乗ってなかったか。私は紅美鈴だ。よろしく」

異変の時とは違い、どこか大人びている優しい笑顔を浮かべた。「横、座っていいか？」と霊夢に尋ねる。霊夢は「いいわよ。お茶出すから少し待ってて」と言ったが、美鈴は「ああ、これまだ残っているようだし、これでいいよ」と言っただけ、魔理沙が使っていた湯のみを手にした。

「異変の時には迷惑をかけてすまなかったね。本来なら内々でなんとかしなければならなかったが、気が付いたらああなっていた」

「仕方ないんじゃない？」

「そうだろうか。まあ、巫女がそう言うならそうなんだろうが、侘びと言うか、ともかくゴマ団子を作ってきたから食べてくれ」

美鈴は霊夢に小さな包みを手渡した。特に気にした様子もなく包みを美鈴の前で開けて中を見ると、食欲をそそるような綺麗な色をしたゴマ団子が並んでいた。

その一つを霊夢は手に取り、食べる。

「おいしいわ」

「ありがとう」

霊夢がゴマ団子の一つ食べきるまで、互いに会話はなかった。食べ終わってから、霊夢は美鈴に尋ねた。

「それで、今仕事はどうしているの？」

「ああ。辞めたはずの門番再びっていうところだ」

「それまたどうして？」

「クビになったから辞めるって話しをしたらレミリア殿にわんわん泣かれ、おまけに雇い主であるフラン殿にもこう引きとめられれば、さすがにな」

「その後あの墮メイドがボコボコにされたのが目に見えるわ」

「それ以上だったよ。レミリア殿に『めーりんをクビにするしゃくやなんてだいつきらいー』って言われて、咲夜殿はしばらく復帰できなかつたよ」

「それも簡単に目に浮かぶわ」

その後は当たり障りのない会話が通っていたが、美鈴は今日来た目的を告げることにした。

「それで、博麗の巫女」

「霊夢よ。美鈴」

「解った。霊夢。もしよかったらだけど、私と手合わせをしてくれないだろうか」

霊夢も少し考えた。そして、答えた。

「そうね。今回の異変、不完全燃焼気味だったからいいわ」
持っていた湯のみを縁側に置き、神社の境内に移動する。美鈴もその後について行く。

互いに定位置に着き、美鈴が「合図はどうする？」と尋ねる。霊夢はにやりと笑い、「対面し合った時が合図でしょう」と答えた。

美鈴もにやりと笑った。

霊夢がすつと構え、美鈴も構える。

そして、誰にも見られることのない、2人だけの戦いが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2593y/>

なにかが違うげんそうきょう

2011年12月18日10時46分発行